

令和4年度農作物病害虫発生予察情報

発生予報 第3号（6月予報）

発表日：令和4年5月26日

岩手県病害虫防除所

1 情報の要点

(1) 水稲

- ア. いもち病の発生は平年並の予報ですが、補植用取置苗はいもち病の伝染源となるので、直ちに処分しましょう。
- イ. 斑点米カメムシ類であるアカスジカスミカメ幼虫のふ化盛期を迎えています。また、前年の発生量が多かったため、幼虫の発生量も多くなると予想されます。ふ化盛期の前後5日間に地域一斉に水田畦畔、牧草地、雑草地、農道等の草刈りを行い、その後も、イネ科植物を出穂させないような管理を心がけましょう。

(2) りんご

- ア. 黒星病の発生はやや多の予報です。発病葉や発病果は速やかに摘み取り、土中に埋める等、適正に処分しましょう。
- イ. ナミハダニとリンゴハダニの発生がやや多の予報です。わい性樹では主幹近くの新梢下位葉をよく観察し、要防除水準（寄生葉率30%）に達したら防除を実施しましょう。

(3) 野菜・花き

- ア. きゅうりではモザイク病とワタアブラムシの発生がやや多の予報です。5月の気温が平年よりやや高く推移したため、アブラムシ類の発生が早まると考えられるので、発生源となる周辺雑草の除草を行い、定植時の粒剤施用とその後の茎葉散布による初期防除を徹底しましょう。
- イ. りんどうではリンドウホソハマキ越冬世代成虫の羽化が確認されています。成虫や潜葉痕、食害痕が確認されたら防除を実施しましょう。

2 農薬の安全使用

- (1) 岩手県では、6月1日から8月31日までを農薬危害防止運動期間と定め、農薬の使用や販売に関する正しい知識の普及・啓発をはじめとする各種の取り組みを実施します。
- (2) 農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないよう十分配慮し、対策を講じましょう。

【利用上の注意】

本資料は、令和4年5月20日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

- ・ 農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。
- ・ 農薬使用の際は（1）使用基準の遵守 （2）飛散防止 （3）防除実績の記帳を徹底しましょう。

【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネットでもご覧いただけます。

<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/boujo/index.html>



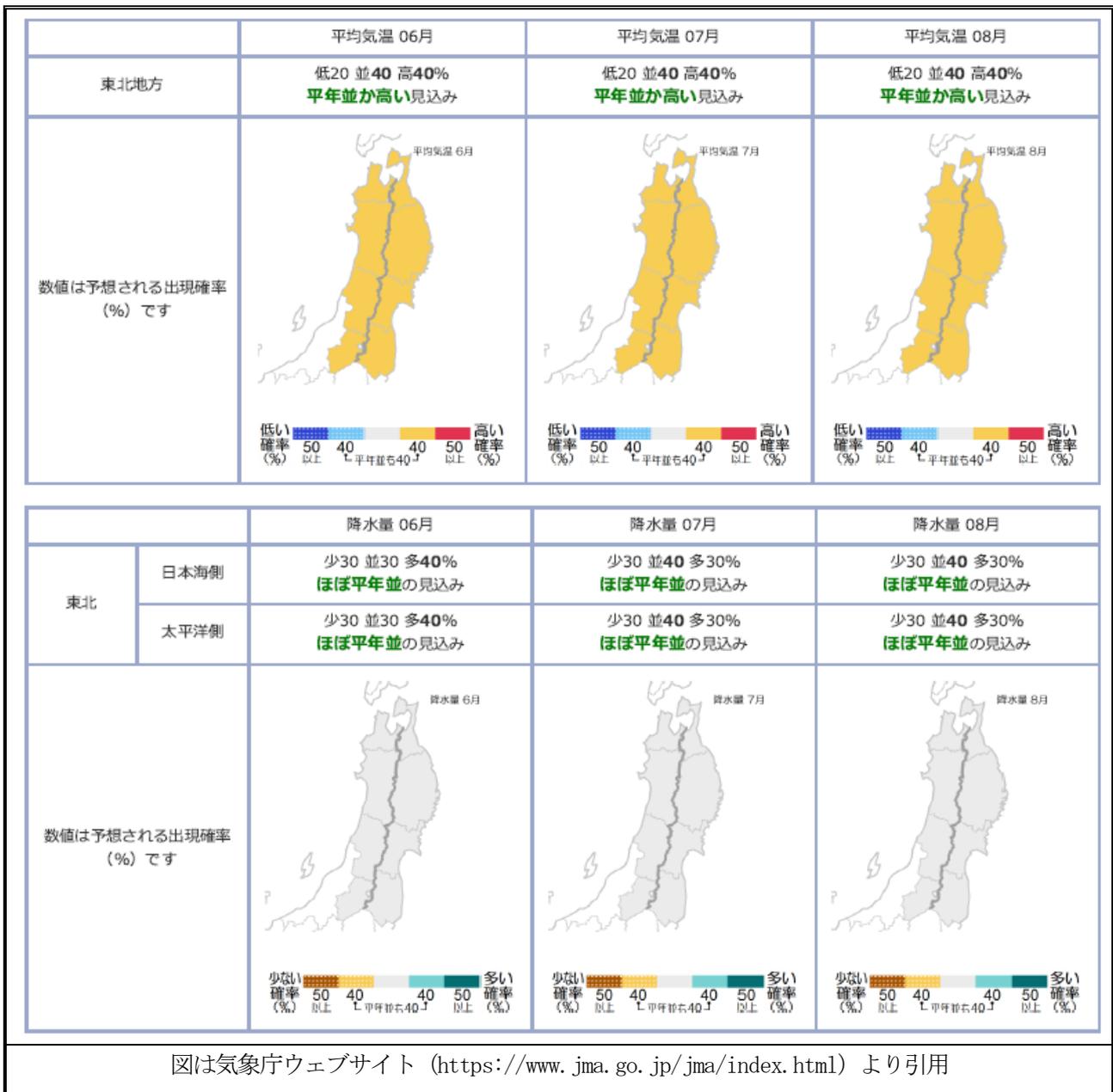
3 3か月予報（6月～8月、仙台管区气象台、5月24日発表）

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

6月 期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

7月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

8月 天気は数日の周期で変わるでしょう。



水稲病害

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
いもち病 (葉いもち)	—	並 (平年少発生)	(1) 前年の穂いもちの発生は平年並であり、罹病わら・籾殻等の伝染源量も平年並と考えられる。(±) (2) 平年並に箱施用剤が広く使用されている。(±) (3) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
ばか苗病	—	やや少	(1) 育苗期の調査では、県内広く発生が確認されたが、発生箱率は平年より低かった。(—)

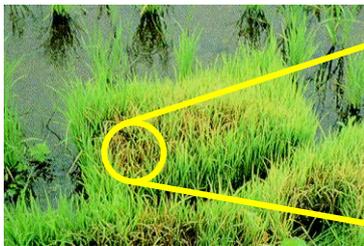
記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【いもち病】

- (1) 補植用取置苗は、補植作業が終了したら、直ちに処分する。
 - ア 取置苗は遅くとも6月上旬までに土中に埋めるなどして処分する。畦畔に裏返しておくだけでは不十分。
 - イ 処分するときに、いもち病が発病していないか確認する。
 - ウ 発病していた場合は、周囲の本田内でのいもち病発病について観察する。
- (2) 早期発生は大きな被害につながるので圃場をよく観察し、早期発見、早期防除に努める。
- (3) 葉いもち予防剤を水面施用する場合は、6月20～25日頃実施する。例年早期に発生する地域は、施用時期を1週間程度早める。

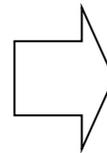
※ 本年の取置苗での発生状況は、6月中旬に発表予定の病害虫防除速報を参照のこと。



取置苗は露がつきやすく
乾きにくいいため、発病しやすい



いもち病の濃密な
伝染源となる



「早期発生」

ずりこみ等致命的な被害につながる

※早期発生とは、取置苗や持ち込み等、特定の伝染源から、早期に始まるいもち病の本田発生。

【ばか苗病】

- (1) 発病株は伝染源になるので、圃場で発生を見つけ次第株ごと抜き取り、焼却または土中に埋めるなどして処理する。
- (2) 稲株が大きくなってからでは抜き取りにくいので、早期発見を心がける。

水稻虫害

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
イネミズゾウムシ	—	並	(1) 5月下旬の巡回調査では、越冬世代成虫の発生圃場率は平年並であった。(±) (2) 前年の発生量は平年並で、越冬量は平年並と考えられる。(±) (3) 平年並に箱施用剤が広く使用されている。(±)
イネドロオイムシ	産卵盛期早	並 (平年少発生)	(1) 5/24現在の有効積算温度で予測された産卵盛期は、県中南部は5月第6半旬、県北部は6月第1半旬である。 (2) 6月の気温は平年並か高い予報。 (3) 前年の発生量は少なく、越冬量は少ないと考えられる。(－) (4) 平年並に箱施用剤が広く使用されている。(±) (5) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、被害を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－-)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【イネミズゾウムシ・イネドロオイムシ】

- 初期害虫を対象とした箱施用剤を使用した圃場では、本田防除は不要である。
- 箱施用剤を使用していない圃場では、畦畔から2mほど入った場所から連続25株調査する。イネミズゾウムシは本田侵入盛期に成虫8頭以上、イネドロオイムシは産卵盛期に卵塊13個以上見られる場合に防除を行う。
- 有効積算温度で予測されたイネミズゾウムシの本田侵入盛期は、県中南部は5月第5半旬、県北部は5月第6半旬ですすでに防除時期となっているので、直ちに調査を行い、上記要防除水準を超えた場合は防除を行う。

【斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）】

- 県内各地のアカスジカスミカメ越冬世代幼虫のふ化盛期の予測日（5月24日現在）は、表1のとおりであり、県中南部ではふ化盛期を迎えている。
- 前年9月中旬（収穫期）の発生圃場率が平年より高かったことから、越冬世代幼虫の発生量は多くなると予想される。
- ふ化盛期の前後5日間に、越冬場所である水田畦畔、牧草地、雑草地、農道等の草刈りを地域一斉に行う（平成19年度試験研究成果参照）。県中南部ではすでにふ化盛期を迎えているので、直ちに草刈りを行う。
- 草刈り後10日間程度は雑草の発生は抑えられるが、その後も、イネ科植物（イタリアンライグラス、スズメノカタビラ等）を出穂させないように管理する。

表1 アカスジカスミカメ越冬世代幼虫のふ化盛期（今後の気温が平年並に推移した場合の予測）

年次	一関	江刺	北上	大船渡	盛岡	二戸	軽米	宮古	松尾	遠野	湯田	久慈
令和4年	5/20	5/20	5/21	5/25	5/22	5/26	5/26	5/26	5/28	6/3	6/9	6/4
平年	5/25	5/25	5/26	5/30	5/29	6/3	6/3	6/4	6/2	6/5	6/11	6/8
(参考) 令和3年	5/25	5/25	5/28	5/27	6/1	6/5	6/4	6/3	6/6	6/6	6/11	6/5

※5月23日までは各地点におけるアメダス日平均気温実況値、以降は日平均気温平年値（10年平均）を用いて算出。

3 防除上の留意事項

- イネドロオイムシについては、カーバメート系殺虫剤の効果が劣るところでは他系統の薬剤を選択する。

りんご病害

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	－	やや多	(1) 前年の巡回調査での発生園地率は平年より高かった。(+) (2) 5月後半の巡回調査では、前年に多発した一部園地で確認された。(±) (3) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
斑点落葉病	－	並	(1) 5月後半の巡回調査では、発生が確認されなかった。(－) (2) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、発生に好適な条件。(＋)
うどんこ病	－	並	(1) 5月後半の巡回調査では、一部の園地で発生が確認された。(±) (2) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－-)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- (1) 6月は褐斑病や斑点落葉病等の様々な病害の感染時期である。梅雨期は週間天気予報等を活用し、降雨前の予防散布に努める。
- (2) 耐性菌の発達を防ぐため、落花期散布以降は黒星病を対象としたE B I 剤及びS D H I 剤の使用を避ける。

【腐らん病】

- (1) 一度処置を行った園地でも、再度園地をよく観察し、病患部の発見に努める。
- (2) 枝腐らんや胴腐らんの剪除、削り取りを徹底する。また、剪除した枝や削り取った病患部は園地内に残さず、集めて処分する。

【黒星病】

- (1) 園地を見回り、発生が確認された場合は見つけ次第、発病葉（図1～3）や発病果（図4）を摘み取り、土中へ埋没させる等して適正に処分する。特に、前年に発生がみられた園地では十分に注意する。
- (2) 苗木等の未結果樹での発生にも注意し、成木と同様に薬剤防除を徹底する。
- (3) 他病害との同時防除を兼ねて、本病に効果のある予防剤を定期的に散布する。
- (4) 散布ムラがないように十分量を丁寧に散布する。降雨が予想される場合は、降雨前に散布する。



図1 果叢葉の葉裏病斑



図2 葉表の初期病斑



図3 隆起した葉表の病斑



図4 果実病斑

【褐斑病】

- (1) 落花 20 日後までの初期防除が重要である。前年発生園では、効果の高い薬剤（マンゼブ水和剤、デランフロアブル、ラビライト水和剤）を選択する。

【斑点落葉病】

- (1) 薬剤の到達しにくい樹上部の徒長枝から蔓延することが多いので、不要な徒長枝は早めに整理する。
- (2) 病原菌は高温多湿を好み、2～3日降雨が続くと発生が目立つようになる。週間天気予報等に注意し、予防散布に努める。
- (3) 本病は7月上旬の発生を抑えることで、夏季に多発する危険性を大幅に軽減することができる。例年7月に多発する園地では、6月下旬の定期散布に効果の高い薬剤（ナリアWDG）を散布する。

【黒点病】

- (1) 6月下旬頃まで感染が続くので、この時期の散布間隔が空き過ぎないように注意する。

【炭疽病】

- (1) 本病が例年多発する園地では、落花 30 日後までの定期散布剤にアントラコール顆粒水和剤を選択する。

【モニリア病】

- (1) 実ぐされ、株ぐされの発生が見られたら、翌年の伝染源となるので、摘み取って、園地内に残さないよう必ず処分する。

りんご虫害

1 予報（6月）の内容

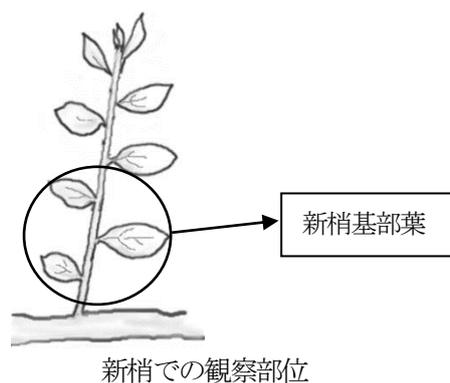
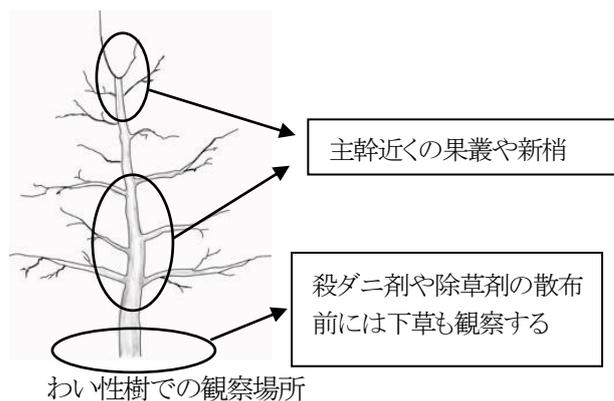
病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
リンゴハダニ	—	やや多	(1) 5月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並であった。(±) (2) 6月の気温は、平年並か高い予報で、発生に好適な条件である。(＋)
ナミハダニ	—	やや多	(1) 5月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並であった。(±) (2) 6月の気温は、平年並か高い予報で、発生に好適な条件である。(＋)
キンモンホソガ	第1世代羽化時期やや早	並	(1) 有効積算温度から推測される第1世代の羽化盛期は、平年よりやや早い。 (2) 前年の第4世代の発生園地率は、平年並であった(盛岡地域除く)。(±)
ギンモンハモグリガ	—	少	(1) 5月後半の巡回調査における発生園地率は、平年より低かった。(－)
シンクイムシ類	やや早	やや多	(1) 6月の気温は、平年並か高い予報。 (2) 前年の被害果発生園地率は、平年より高かった。(＋)
果樹カメムシ類	—	やや多	(1) 簡易トラップによるクサギカメムシの越冬量は多かった。(＋) (2) 5月第4半旬現在の集合フェロモントラップへの誘殺数は、平年並であった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハダニ類】

- (1) 普通樹では主幹・主枝の徒長枝の下位葉、わい性樹では主幹近くの新梢下位葉を良く観察し、ハダニの寄生葉率が30%に達したなら防除を実施する。



- (2) ひこばえや主幹・主枝から出ている不要な徒長枝は、薬剤の散布ムラの原因となりハダニの増殖源となるので、なるべく早く（6月前半まで）剪除する。また、薬剤の散布時には十分量を丁寧に散布する。
- (3) 薬剤の効果を高めるため、殺ダニ剤の散布7日前頃までには下草を処理しておく。
- (4) 薬剤抵抗性ハダニの発現回避のため、同一系統の薬剤は1シーズン1回使用に限る。また、複数年を単位とした薬剤のローテーションを厳守する。

【キンモンホソガ】

- (1) 多発園（6月上旬～中旬に、20果叢当たり5マイン以上の発生園）では、第1世代の羽化状況（6月上中旬頃）に応じて第2世代を対象とした防除を行う。
- (2) ネオニコチノイド剤は羽化始期～羽化前期、IGR剤は羽化始期～羽化盛期に使用すると効果が高い。羽化始期は羽化盛期の5日前、羽化前期は羽化盛期の5日後が目安である。
- (3) 少発園では、7月下旬～8月上旬に第3世代を対象に防除を行う。

表 アメダスデータによるキンモンホソガ第1世代羽化盛期の予測（5月24日現在）

地点名（標高）	羽化盛期（平年並）	羽化盛期（+2℃）	平年値
盛岡（155m）	6月第2半旬	6月第2半旬	6月第4半旬
北上（61m）	6月第2半旬	6月第2半旬	6月第3半旬

※ 平年値は、平成24年から令和3年までのフェロモントラップへの誘殺盛期の平均からみた羽化盛期

※ 羽化盛期は、当年の越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期（北上は4月第5半旬、盛岡は4月第5半旬）を起点とし算出（平成22年防除技術情報）

※ 5月23日まではアメダス現況値を、5月24日以降は平年値を利用し、平年並に推移した場合および平年より2℃高く推移した場合の2通りを示した

※ 観測地点の標高より100m増すごとに羽化盛期は3～4日遅れるので注意する

【ギンモンハモグリガ】

- (1) キンモンホソガとの同時防除が行われているので、一般に本種を対象とした防除は不要である。

【シンクイムシ類】

- (1) 6月中下旬からモモシンクイガ越冬世代の羽化が始まるので、散布間隔を空けずに防除を実施する。
- (2) 交信攪乱剤設置園では、フェロモントラップへのモモシンクイガの誘殺が確認されたら、薬剤防除を行う。
- (3) スモモヒメシンクイのスモモ等での発生が増加する時期なので、その後のりんごへの飛来を防ぐため、スモモ等での防除に努めること。

【果樹カメムシ類】

- (1) カメムシ類の飛来は、園地周辺部の結果樹木（ヤマザクラ、キリ、クワ）や防風ネット等も同時に観察する。特に、例年被害の多い園地では、園地内をこまめに観察する。
- (2) 大量の飛来が確認された場合は、効果の高い薬剤により速やかに防除を行う。ただし、合成ピレスロイド剤の連用は、ハダニ類の異常多発や薬剤抵抗性害虫の発現などが懸念されるので行わない。
- (3) 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。

きゅうり

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	—	やや少	(1) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、感染には不適な条件である。(—)
斑点細菌病	—	並	(1) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
べと病	—	並	(1) 6月の気温は平年並か高く、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
うどんこ病	—	並	(1) 6月の気温は平年並か高い予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
モザイク病	—	やや多	(1) アブラムシ類の発生がやや多い見込みであり、本病の感染リスクも高い見込み。(＋)
ワタアブラムシ	やや早	やや多	(1) 5月の平均気温は平年よりやや高く推移しており、発生は早まる見込み。 (2) 6月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

(1) 黒星病、斑点細菌病を対象とした防除を基本とし、入梅以降はべと病を中心とした予防散布を行う。

【黒星病】

- (1) 低温・多雨条件で発生が多く、生育初期に発生すると被害が大きいため、6～7月の防除を重点的に行う。
- (2) 発生後の散布では防除効果が現れにくいので予防散布に努める。
- (3) 生長点や若い葉、幼果に発生しやすいので、生長点等先端部にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。

【斑点細菌病】

- (1) 生育初期に降雨が多いと発生しやすい。定植時にオリゼメート粒剤を施用し、6月下旬から茎葉散布剤で防除する。
- (2) 発生前は、ヨネポン水和剤等を予防散布する。発生後は銅水和剤(混合剤を含む)の効果が優れるが、連用すると薬害(葉の硬化等)が発生しやすいので注意する。

【べと病】

- (1) 発病を確認してからでは被害が大きくなるので予防散布を基本とする。一般に、県中南部は6月下旬、県北部は7月上旬頃から防除を開始する。下葉など、古い葉から発生しやすい。

【うどんこ病】

- (1) 初発を確認してからの薬剤散布でも防除が可能であるが、発病株率が50%を超えると急激に蔓延するので、早期防除を行う。なお、葉裏や茎・葉柄で蔓延するので注意して観察する。

【モザイク病】

- (1) アブラムシ類による媒介や、整枝・収穫等の管理作業の刃物により汁液伝染する。
- (2) 生育初期に激しいモザイク症状が発生した場合には抜き取り処分する。
- (3) 生育期前半のアブラムシ類防除を徹底する。

【ワタアブラムシ】

- (1) 圃場周辺の雑草は発生源となるので除草する。
- (2) 反射資材（反射マルチ、防虫テープ等）を使用して有翅虫の飛来を忌避する（詳細は平成14年度病害虫防除技術情報No.14-3参照）。
- (3) 定植時の粒剤施用とその後の茎葉散布による初期防除を徹底する。
- (4) ネオニコチノイド剤（粒剤を含む）を使用した場合、次回の散布時には別系統の剤を選択する。
- (5) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、同系統の薬剤を連用せず、異なる系統の薬剤をローテーションで使用する。

キャベツ

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
コナガ	—	並	(1) 5月の巡回調査では、圃場での産卵は確認されなかった。(—) (2) 6月の気温は平年並か高い見込みで、降水量はほぼ平年並の予報であり、増殖に好適な条件である。(+)
ヨトウガ	やや早	並	(1) 有効積算温度から推定される産卵盛期は、平年よりも早い。 (2) 昨年秋の発生量は、平年よりも少なかった。(—) (3) 6月の気温は平年並か高い見込みで、降水量はほぼ平年並の予報であり、増殖に好適な条件である。(+)
モンシロチョウ	—	並	(1) 5月の巡回調査では、産卵圃場率は平年より低かった。(—) (2) 6月の気温は平年並か高い見込みで、降水量はほぼ平年並の予報であり、増殖に好適な条件である。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【コナガ】

- (1) 圃場内をよく観察し、幼虫の発生が確認されたら防除を開始する。
- (2) 今後、定植する作型では、定植時に必ず薬剤処理する。
- (3) 薬剤抵抗性個体の出現を回避するため、以下のことに留意する。
 - ア コナガは飛来性の害虫であり、ジアミド系殺虫剤の効果が低いコナガは本県に広く発生している可能性がある。ジアミド系殺虫剤による防除を実施したにもかかわらず、コナガの幼虫が見られる場合には、他系統の薬剤により防除を実施する。
 - イ コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一薬剤、同一系統の連用は避け、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。また、ジアミド系殺虫剤の使用は1作型1回にとどめ、年間使用回数の削減に努める。

【ヨトウガ】

- (1) 有効積算温度から予測した産卵盛期および防除適期は、表1の通りである。
- (2) 成長した幼虫は食害量が多いので、下記を目安に圃場をよく観察し、適期防除を行う。

表1 有効積算温度による産卵盛期および防除適期の予測

アメダス地点	産卵盛期		防除適期	
	本年	平年	本年	平年
軽米	5月30日	6月8日	6月3日 ~ 6月7日	6月11日 ~ 6月16日
奥中山	6月10日	6月17日	6月13日 ~ 6月16日	6月21日 ~ 6月25日
松尾	6月2日	6月6日	6月5日 ~ 6月9日	6月9日 ~ 6月14日
盛岡	5月26日	6月1日	5月30日 ~ 6月3日	6月4日 ~ 6月8日
北上	5月24日	5月29日	5月28日 ~ 6月1日	6月1日 ~ 6月5日

※本年の予測には、5月23日までは各地点におけるアメダス日平均気温実況値、5月24日以降は日平均気温平年値を用いた。

【モンシロチョウ】

- (1) 通常はコナガ、ヨトウガと同時防除される。
- (2) 若齢幼虫の発生が目立つ場合は直ちに薬剤による防除を実施する。

【タマナギンウワバ】

- (1) 若齢幼虫の発生が目立つ場合は直ちに薬剤による防除を実施する。
- (2) 葉裏に産卵することが多いため、防除の際は葉裏まで薬剤が十分かかるように注意する。

ねぎ

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
さび病	－	並	(1) 5月下旬の巡回調査では、発生が確認されなかった。(±) (2) 6月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に感染を助長する条件ではない。(±)
べと病	－	並	(1) 5月下旬の巡回調査では、発生が確認されなかった。(±) (2) 6月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に感染を助長する条件ではない。(±)
ネギコガ	－	第2世代並	(1) 有効積算温度から推定される第1世代の羽化始期は、平年並である。 (2) 5月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりも低かった。(－) (3) 6月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)
ネギハモグリバエ	－	並	(1) 5月下旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。(－) (2) 6月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)
ネギアザミウマ	－	並	(1) 5月下旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりも低く、被害度は平年よりも低かった。(－) (2) 6月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

(1) 降雨日が続くと、さび病、べと病等の発生が懸念されるので、これらの病害に効果のあるマンゼブ水和剤等による予防散布を行う。

【さび病】

(1) 圃場の観察に努め、発病がみられた圃場では直ちに薬剤防除を実施する。

【べと病】

(1) 6月から予防的に薬剤防除を実施する。

【ネギコガ】

(1) 有効積算温度による第2世代の防除適期は、県中南部では平年並（6月第2半旬）と推察される。
(2) 合成ピレスロイド剤は成虫の羽化盛期前～盛期、有機リン剤は羽化盛期～盛期後の散布で効果が高い（平成10年度試験研究成果参照）。

【ネギハモグリバエ】

(1) 地域、年次により発生状況が大きく異なることから、発生状況に応じた防除を行う。

【ネギアザミウマ】

(1) 圃場周辺、畦間の雑草除去に努める。
(2) 適用のある薬剤を選択し、防除間隔が空かないように茎葉散布を実施する。
(3) 発生初期の防除を心がけ、アザミウマの被害が見られたら、散布ムラが生じないように畦の両側から茎葉散布を行う。
(4) 合成ピレスロイド剤等、同一系統の連用を避け系統の異なる薬剤をローテーション散布する。

3 防除上の留意事項

- (1) 収穫期に近い初夏どり作型では、使用基準に注意して薬剤を選択する。

りんどう

1 予報（6月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
葉枯病	—	並	(1) 5月後半の巡回調査では、発生は確認されなかった。(—) (2) 6月の降水量はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
ハダニ類	—	並	(1) 5月後半の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低かった。(—) (2) 6月の気温は平年並か高い予報であり、増殖に好適な条件である。(＋)
リンドウ ホソハマキ	—	やや少	(1) 県中南部では、5月第4半旬に越冬世代成虫の羽化が確認された。 (2) 前年秋期の発生量は、平年より少なかった。(—)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

リンドウホソハマキ越冬世代成虫の羽化が、県北部と県中南部で確認されています。圃場をよく観察し、成虫または潜葉痕や食害痕が認められたら、防除を実施しましょう。

【葉枯病】

- (1) 薬剤散布は10～15日間隔で行う。前年発生の多かった圃場や、下葉を観察して発生が見られる場合は、10日間隔で予防散布を行い上位葉への感染を防ぐ。
- (2) 降雨が続く場合は、散布間隔を狭め、週間天気予報を参考にして降雨前の散布を心掛ける。
- (3) 感受性に品種間差が見られ、エゾ系で高く、ササ系で低い。
- (4) 定植初年株は特に感受性が高いので、防除を徹底する。
- (5) 弱小茎や、こぼれ種から生じた茎葉は、早くから発病しやすいため、折り取り処分する。

【褐斑病】

- (1) 6月下旬～7月中下旬にかけて一次感染し、2～3週間の潜伏を経て7月下旬～8月上旬頃に初発がみられる。特に、前年の発生圃場では本年も発生するため、6月下旬～7月下旬に効果の高い薬剤で、計画的に防除を実施する。
- (2) 株仕立てが不十分であったり、風通しの悪い圃場では発生が多くなるため、適正な茎数に管理する。
- (3) 下位葉や畦の内部、北側などの日当たりの悪い場所で発生が多く見られることから、薬液が株全体にかかるよう散布する。

【ハダニ類】

- (1) 体色が赤色のカンザワハダニと半透明のナミハダニが寄生するが、後者は特に見落としやすいので注意して観察する。
- (2) 雑草はハダニ類の発生源となるので、除草し圃場外へ運び出す。
- (3) 多発してからでは防除が困難となるので、前年多発圃場や常発圃場では下位葉の葉裏を観察し、発生初期に十分量を散布する。
- (4) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

【リンドウホソハマキ】

- (1) 重点防除対象は第1世代の卵、幼虫であるため、圃場をよく観察し、成虫（図1）または潜葉痕や食害痕（図2、3）が認められたら薬剤を散布する。
- (2) フェニックス顆粒水和剤およびディアナSCは、潜葉痕や生長部の食害が初確認された時期と、その10日後の2回散布すると効果が高い（平成26年度試験研究成果、平成30年度病害虫防除技術情報30-5参照）。
- (3) アディオフロアブルの効果低下事例が認められているので、前年、アディオフロアブルを使用しても被害が目立った圃場では、前記（2）に示した薬剤によって防除する。
- (4) 産卵の大部分は葉裏に行われるため、下位葉の葉裏までしっかり薬剤がかかるよう、丁寧に散布する。
- (5) 茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、生長部の被害（図4）を見つけたら折り取り、土中に埋めるなどして処分する。



図1 成虫



図2 潜葉痕

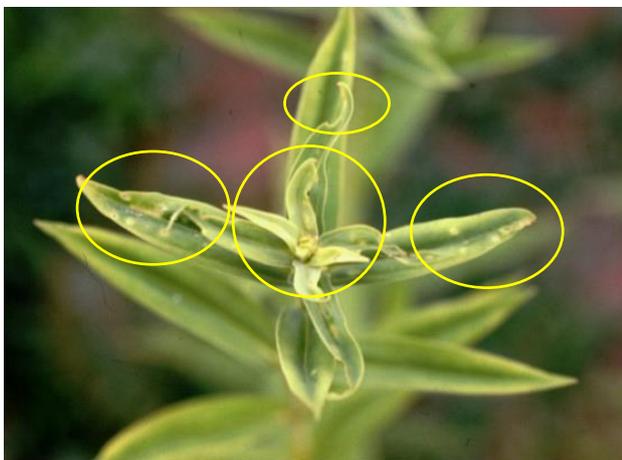


図3 生長部の初期の食害痕



図4 生長部の被害